福岡教育大学紀要，第 56 号，第 5 分冊，181－189（2007）

家庭での性教育に夫婦関係はどう影響しているか

How does marital relationship influence sex education at home ?

高　橋　久美子

Kumiko TAKAHASHI

家政教育講座

（平成18年 8 月30日受理）

１．課題

青少年の性経験率が一段と上昇している。東京都性教育研究会の2002年調査では，都内の高校３年生の性経験率は男子37％と女子46％と高く，男子の12％と女子の９％が中学生の時に性経験をもっている。一方，避妊実行率は低く，性経験のある高校生や中学生の半数以上が避妊をしていない[1)]。このような傾向は大都市に特有の現象ではない。母体保護統計によると，15～19歳女子人口千人当たり件数比でみた10代女子の中絶率は，1995年の６から2000年には12に倍増した[2)]。さらに，規範意識の全体的低下にともなって性規範意識も低下している[3)~5)]。援助交際が流行語にまでなったが，警察庁調査によると，携帯電話による出会い系サイトへの書き込みのほとんどが中高生の女子からの買春の誘いである[6)]。2003年に施行された出会い系サイト規制法では，買春をする側だけでなく誘う側も処罰の対象になった。

性経験を特別に重視したり隠したりする必要のない日常の経験の一つとしてとらえる，性の日常化現象が青少年の間に進行しているという問題が指摘されている[7)]。近年の青少年の性意識や性行動の変化と問題を考えると，性に関する悩みや関心に応えながら，男女のかかわり方や生き方について理解させ考えさせるための性教育は，避けることのできない急務の課題であるといえる。教師による指導や話し合いだけでは十分ではない。家庭でも主要課題の一つとしてとらえ，取り組まなければならない状況に来ている。

だが，親子の間では性に関することを話し合うことは難しい。家庭での性教育への取り組みについて，松浦らは全国規模で行った調査結果をもとに，親が性に関することは話題にしないという拒否的態度で性を特別視させることが，子どもの禁欲的態度をつくり，性交開始年齢を高めることを提言している[8)9)]。しかし，情報通信技術の進歩によって性の開放や商品化に歯止めがかからない現状では，親による無言の圧力の効果は期待しにくいように思う。黙認や無関心とも受け止められかねない[10)]。家庭でのルール作りにおいて，親が子どもとの対立を回避していることを懸念させる調査結果もある[11)]。性に関することを話題にすればよいというものでないことは確かであり，どう話し合うかが重要である。

筆者はこれまで家庭における性教育への取り組みについて研究を進めてきた。身体的・生理的な事柄と社会的・心理的な事柄を考慮に入れて10項目を取り上げ，大学生がこれまで家庭や学校で受けた性教育の内容と，親になった場合に家庭で必要と思う性教育の内容を調査し，家庭で性教育への取り組みが乏しい現状と課題を，学校教育と関連させて検討した[12)]。中学生と父母に調査を行い，女子に対しては月経指導への内容の偏り，男子には意識的な取り組みがなされず放置されている実態，家庭でなされている性教育実践について親と子の認知に大きなずれがあるという問題を考察した[13)]。家庭での性教育に影響すると思われる親の性意識のなかでもセックス観に焦点をあて，父親と母親のセックス観の差異を検討し，性教育への取り組みを抑制する要因と促進する要因の分析を行った[14)]。

さらに，本研究では夫婦関係に着目し，性教育への取り組みを促進する要因を明らかにすることを目的とした。家族関係は相互に関連している。図１に示したように，親子関係と夫婦関係は，父と夫の役割そして母と妻の役割によって結ばれている。親としての役割行動を検討する際には，親子関係に影響を及ぼす要因として夫婦関係をとら

え，分析する必要がある。だが，親子関係と夫婦関係の関連を明らかにすることに焦点をあてた研究はあまりなされていない。

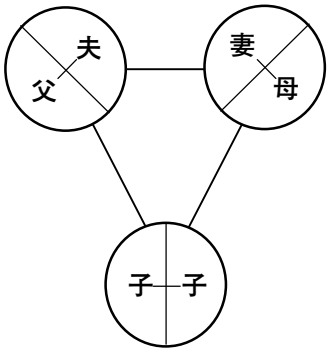

図１　親子関係と夫婦関係

親の養育態度が子どもの人間形成に及ぼす影響については数多くの調査研究があり，親子関係研究の主要領域をなしている[15]。一方，夫婦関係は子どもの問題行動に影響を及ぼし健全育成にとって重要な要因であるという指摘は多いが[16)~18]，親としての養育態度と夫婦関係の関連について調査分析した研究は少ない。長津らが行った，1970年から20数年間の家族研究における夫婦関係研究レビューによると[19]，夫婦の勢力関係との関連について研究がいくつかある程度である[20)21]。斧出らは夫婦の勢力関係だけでなく結婚満足度との関連についても分析しているが，子どもの側からの調査である[22]。梶浦らの研究では夫と妻と子を対象に調査はしているが[23]，夫婦の共同性と子どもの社会的適応および情緒安定の間の関連を分析しており，親としての養育態度に夫婦関係がどう関連しているかをとらえてはいない。

本研究の目的は，性教育に焦点をあて，夫婦関係が親としての役割行動に及ぼす影響を検討することにある。家庭での性教育においては，性に関する知識を理解させるだけでは十分でない。家庭が男女の愛情を結実させ，相互の協力によって運営される場であることを考えると，対話による指導にとどまらず，父母が協力し合う姿を具体的に示すことが大切である。日常の協力による支え合いが愛情の交流と結びついていること，性と生の結合を，親の夫婦関係を通して目に見える形で理解させる必要がある。その場合に，夫の家事参加は子どもに対しては夫婦や男女のかかわり方の具体的モデルとなる一方，親にとっても，性教育への取り組みを促進させる働きがあるのではないかと考えられる。夫が家事に参加することは夫婦の会話を活発にし，さらに，夫婦の一体感を強めて身体的触れ合いを増加させることによって，性教育への取り組みを促進させる要因となるのではないかと予想される。

家庭での性教育への取り組みに影響する要因については，すでに前報で[14]，親の側の調査データから，禁欲的セックス観が性に関する会話抵抗感を生じさせ，性教育への取り組みの抑制要因となることを明らかにした。さらに，妻は夫に比べて否定的で禁欲的セックス観をもっており，妻の禁欲的セックス観はセックスの快楽の否定や男性による女性の道具視の意識と結びついていることが確かめられた。夫と妻のセックス観は，日常の協力や会話や愛情交流などの面における夫婦関係の質と関連があると予想される。そこで本研究では，家庭で性教育への取り組みを促進させる要因を見出すことを目的とし，夫婦関係が夫と妻のセックス観に及ぼす影響についても検討を行う。

2．方法

図２に研究の枠組みを示した。独立変数である夫婦関係の内容として，夫の家事協力，夫婦の会話頻度，夫婦のスキンシップ行動を取り上げた。

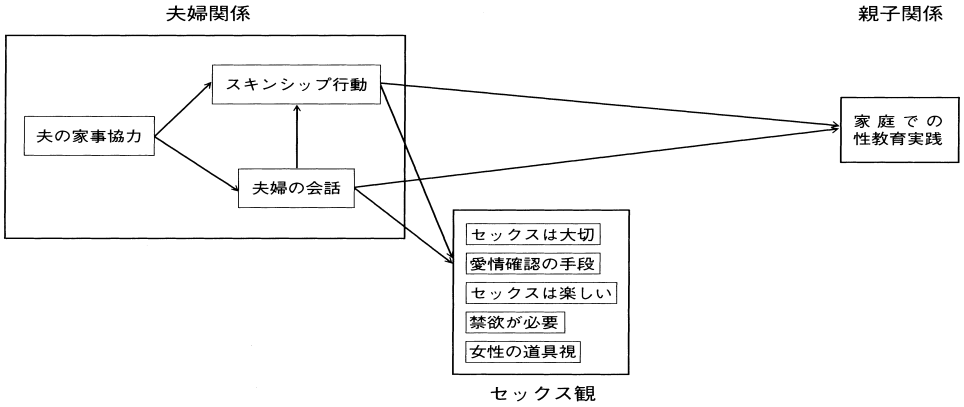

図２　研究の枠組み

性愛の対象である夫婦間の親密な愛情交流の身体的表現にはさまざまな形態があるが，子どもが視覚的にとらえることの可能な形態として，腕を組んだり肩を寄せ合ったりする身体的触れ合い，すなわち，スキンシップ行動を取り上げた。夫の家事協力，夫婦の会話頻度，夫婦のスキンシップ行動のそれぞれについて,「よくする」から「しない」までの4段階評定で尋ねた。

目的変数は夫と妻のセックス観と家庭での性教育実践である。前報と同様に，セックス観としては「セックスは人間にとって大切なものである」「愛を確かめ合うためにはセックスが必要である」「セックスは楽しいものである」「性的欲求はできるだけおさえるべきである」「男性は女性をセックスの対象としてしか見ていない」の5項目を取り上げ,「そう思う」から「そう思わない」までの4段階評定で把握した。家庭での性教育実践については，性教育の内容を10項目にまとめ，子どもと話し合ったり指導したりしたことがある項目を選択してもらい，選択された項目数をもとに性教育実践の程度を測定した。取り上げた10項目とは，男女交際のし方，男女間の友情と恋愛，思春期における心と体の発達，男女の体のつくりと働き，生命誕生のしくみ，性交，避妊の方法，結婚における男女の役割と協力，乳幼児の保育，親になることの責任と役割である。

分析には，1995年に北九州市内の公立中学校の生徒と父母を対象に行った調査のなかの，父母の調査データの一部を用いた。分析に用いた調査データは10年前に実施したものだが，家庭での性教育については調査協力が得にくく実証研究がきわめて少ない，10年前と比べて家庭での性教育への取り組みに大きな変化がみられない，研究の推進には小規模でも同一対象についての多面的な考察を蓄積していく必要があると考えた。学校から子どもを通して調査用紙を配布し，回収した。回収にあたっては夫と妻それぞれに封筒を用意し，分析の対象には夫婦がそろっているケースを選択した。分析に用いたサンプルの数は188組の夫婦であり，核家族が87%，夫の85%と妻の75%が40歳代である。

3．分析結果

（1）夫の家事協力，夫婦の会話，スキンシップ行動の状況

図3に示したように，夫婦関係の内容として取り上げた3要素のいずれも夫と妻の間で認知に差はみられない。夫の家事協力では「よく手伝う」は夫1割に対し妻2割だが,「時々手伝う」を合わせると夫と妻ともに5割で差がない。夫の家事協力に比べれば夫婦の会話頻度では「よく話す」が多いとはいえ,夫と妻のいずれも6割程度である。夫婦の会話については会話内容を10項目挙げて複数回答で尋ねた。「子どものこと」を挙げる者は9割いるが，2位の「社会的事件」5割との差は大きく，さらに，夫と妻ともに会話の頻度と内容に関連がみられ，会話頻度が少ない者は話題が子どものことに限られる傾向がある。夫婦が肩を寄せ合ったり腕を組んだりするスキンシップ行動は，「よくする」が夫の1割と妻の2割にすぎない。夫と妻ともスキンシップ行動を「しない」が4割を占め，身体的触れ合いによる夫婦間の愛情交流行動は夫の家事協力よりもさらに乏しい。

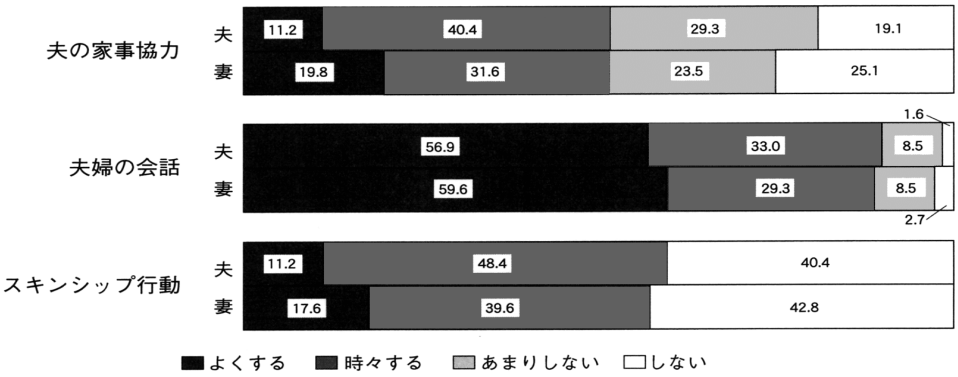

図3　夫婦関係についての夫と妻の認知

個々の家庭における夫と妻の認知の一致・不一致の状況を分析した結果，夫の家事協力（χ^2=98.2, df=9, p <0.001），夫婦の会話頻度（χ^2＝65.0,df

=9, p<0.001), スキンシップ行動（χ^2=65.9,df=9, p<0.001）のいずれについても関連が認められた。夫が「よくする」ととらえている家庭では妻も，妻が「よくする」ととらえている家庭では夫も，「よくする」ととらえている者が多い。夫婦関係の3要素のいずれも夫と妻の認知は一致する傾向がある。

表1は，夫の家事協力，夫婦の会話頻度，スキンシップ行動の3要素間の相互関連性を統計的検定した結果を示したものである。夫の家事協力と夫婦の会話頻度との関連については，予想に反して，夫と妻のいずれも夫の家事協力の程度の違いによって夫婦の会話頻度に差がみられなかった。夫の家事協力と夫婦のスキンシップ行動については妻のみ関連が認められ，夫が家事をよくすると受け止めている妻は夫とスキンシップ行動をよくするという者が多い。夫婦の会話頻度とスキンシップ行動については，夫と妻のいずれも関連が認められ，夫婦の間で会話が多い者ほどスキンシップ行動も多い。

表1　夫婦関係の要素間関連

	夫	妻
夫の家事協力×夫婦の会話	5.9	6.1
夫の家事協力×スキンシップ行動	9.0	17.4 **
夫婦の会話×スキンシップ行動	40.6 ***	20.1 **

夫婦関係の3要素の4段階評定結果をもとにカイ2乗検定を行った。**P<0.01，***P<0.001。

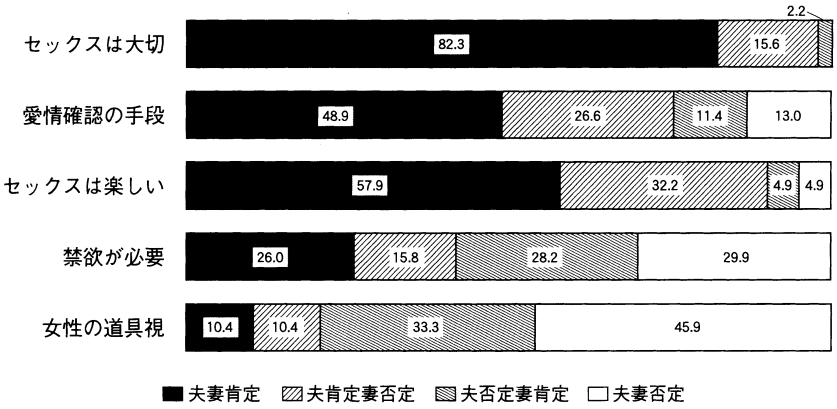

図4　夫と妻のセックス観の一致・不一致

（2）夫と妻のセックス観との関連

家庭でしつけや教育に一貫性をもたせるには夫と妻の考え方を一致させることが必要だが，どう一致させるかという点も重要である。夫と妻が性に対して自由で肯定的であるか，禁欲的で否定的であるかによって，家庭の性文化的教育環境は異なる。図4は，各家庭における夫と妻のセックス観の一致・不一致の状況をとらえたものである。4段階評定された結果を肯定と否定の2分類にまとめて比較した。

「セックスは大切」の項目では夫と妻のどちらも肯定の家庭が8割を占め，この項目に関しては肯定一致型の家庭が大多数であるが，他の4項目では不一致型が4割程度もある。性教育をする際に，夫と妻のセックス観の違いを調整する必要がある家庭が多いことが挙げられる。4項目のなかでも，「愛情確認の手段」と「セックスは楽しい」では肯定一致型が，「女性の道具視」では否定一致型が，それぞれ5割程度あり，多数派を構成している。だが，「禁欲が必要」では肯定一致型と否定一致型がほぼ同数で，主要なタイプはみられず，分散している。セックス観のなかでも禁欲の必要性の意識については，親の側の考え方の大勢が定まらない状況にあるといえる。

各家庭の夫と妻のセックス観の一致・不一致を統計的検定した結果，セックスは大切（χ^2=0.8,df=1,n.s.），セックスは楽しい（χ^2=1.4,df=1,n.s.），禁欲が必要（χ^2=3.2,df=1,n.s.），女性の道具視（χ^2=0.7,df=1,n.s.）の4項目では関連がなく，関連が認められたのは愛情確認の手段（χ=4.6,df=1, p<0.05）の1項目のみである。夫婦関係の3要素についてはいずれも夫婦単位の分析で関連が認められたが，セックス観については関連がほとんどみられなかった。

表2に，夫婦関係とセックス観の関連について統計的検定の結果を示した。全般的にみて夫では関連がほとんどみられないのに対し，妻では多くの項目で関連が認められた。夫の家事協力については，妻の場合も5項目のセックス観のいずれとも関連がみられなかったが，夫婦の会話頻度については，妻では「愛情確認の手段」と「セックスは楽しい」の2項目との間で関連が認められた。さらに，スキンシップ行動については，「セックスは大切」「セックスは楽しい」「禁欲が必要」「女性の道具視」の4項目との間で関連が認められた。妻が肯定的セックス観をもつことに対し，夫婦のスキンシップ行動と会話が影響を及ぼしている。

表2　セックス観に対する夫婦関係の関連

夫

	セックスは大切	愛情確認の手段	セックスは楽しい	禁欲が必要	女性の道具視
家事協力	3.2	1.8	2.8	1.5	3.8
夫婦の会話	1.9	1.5	0.5	1.5	2.8
スキンシップ行動	7.6 *	1.8	4.1	1.6	0.4

妻

	セックスは大切	愛情確認の手段	セックスは楽しい	禁欲が必要	女性の道具視
夫の家事協力	1.9	2.4	2.6	3.8	4.0
夫婦の会話	5.1	12.9 **	6.2 *	4.2	4.8
スキンシップ行動	7.5 *	0.4	17.4 ***	10.6 **	10.7 **

セックス観の肯定・否定と夫婦関係の3要素の4段階評定の関連についてカイ2乗検定を行った。* P<0.05，**P<0.01，***P<0.001。

（3）性教育実践に及ぼす影響

夫婦関係が家庭での性教育実践に及ぼす影響についての統計的検定の結果を表3に示した。夫と妻のいずれも，夫の家事協力および夫婦の会話頻度の2項目と性教育実践との間では関連がみられなかった。この点は予想に反した結果であるが，スキンシップ行動と性教育実践との間では夫と妻のいずれも関連が確かめられた。すなわち，夫と妻のいずれも夫婦間のスキンシップ行動が多い者は性教育実践も多い。

表3　家庭での性教育実践に対する夫婦関係の関連

	夫	妻
夫の家事協力	1.4	8.0
夫婦の会話	5.7	8.4
スキンシップ行動	16.9 **	20.3 ***

家庭での性教育実践の程度を，子どもと話し合ったり指導したことがある項目数をもとに3分類（0，1～3，4～10）し，カイ2乗検定を行った。**P<0.01，***P<0.001。

男子の性教育に対しても女子の性教育に対しても父母が共に取り組むことが望ましいが，実際にはどうか。夫と妻のいずれかが不明である家庭を除いた144家庭について，男子と女子の親に分け，夫の性教育実践と妻の性教育実践の関連を検討した結果，男子（χ^2=10.6,df=4,p<0.05）と女子（χ^2=11.1，df=4,p<0.05）の双方について，夫の性教育実践の程度と妻の性教育実践の程度との間で関連が認められた。夫が性教育に熱心に取り組んでいる家庭では妻も，妻が熱心に取り組んでいる家庭では夫も，熱心に取り組んでいる者が多い。一般的には家庭で性教育はあまりなされておらず，女子に比べて男子ではさらに乏しい現状にあるが，性教育に積極的な家庭では，男子と女子の別なく父親と母親が共に取り組む傾向がある。

表4から明らかなように，144家庭のうち，性教育の内容として取り上げた10項目について夫と妻

表4　夫と妻の性教育実践の関連　　（実数(%)）

妻＼夫	0	1～3	4～10	計
0	15（10.4）	4（ 2.8）	2（ 1.4）	21（ 14.6）
1～3	31（21.5）	36（25.0）	10（ 6.9）	77（ 53.5）
4～10	8（ 5.6）	29（20.1）	9（ 6.3）	46（ 31.9）
計	54（37.5）	80（47.9）	34（14.6）	144（100.0）

各家庭の夫と妻を単位とし，家庭での性教育実践の程度の関連を検定した結果，
χ^2=18.7，p<0.001。

のどちらも全くしていないという家庭は15家庭（10.4%）であった。一方，どちらも4項目以上しているという夫妻とも性教育実践が多い家庭は9家庭（6.3%）であった。夫妻とも性教育実践が多い家庭の夫と妻の実践項目数の平均は6.0と6.8であり，全体の平均はそれぞれ1.6と2.8である。夫妻とも性教育実践が多い家庭では夫と妻の性教育実践項目数の差が小さい。

図5は，性教育に夫と妻が共に積極的に取り組んでいる9家庭の取り組み方の特徴を明らかにするため，夫と妻が「どちらもしている」「どちらかはしている」「どちらもしていない」の3タイプに分類し，調査対象者全体と比較したものである。全体では10項目の全てで「どちらもしていない」という家庭の割合が多く，とくに「性交」「避妊の方法」「乳幼児の保育」の3項目では8割以上の高

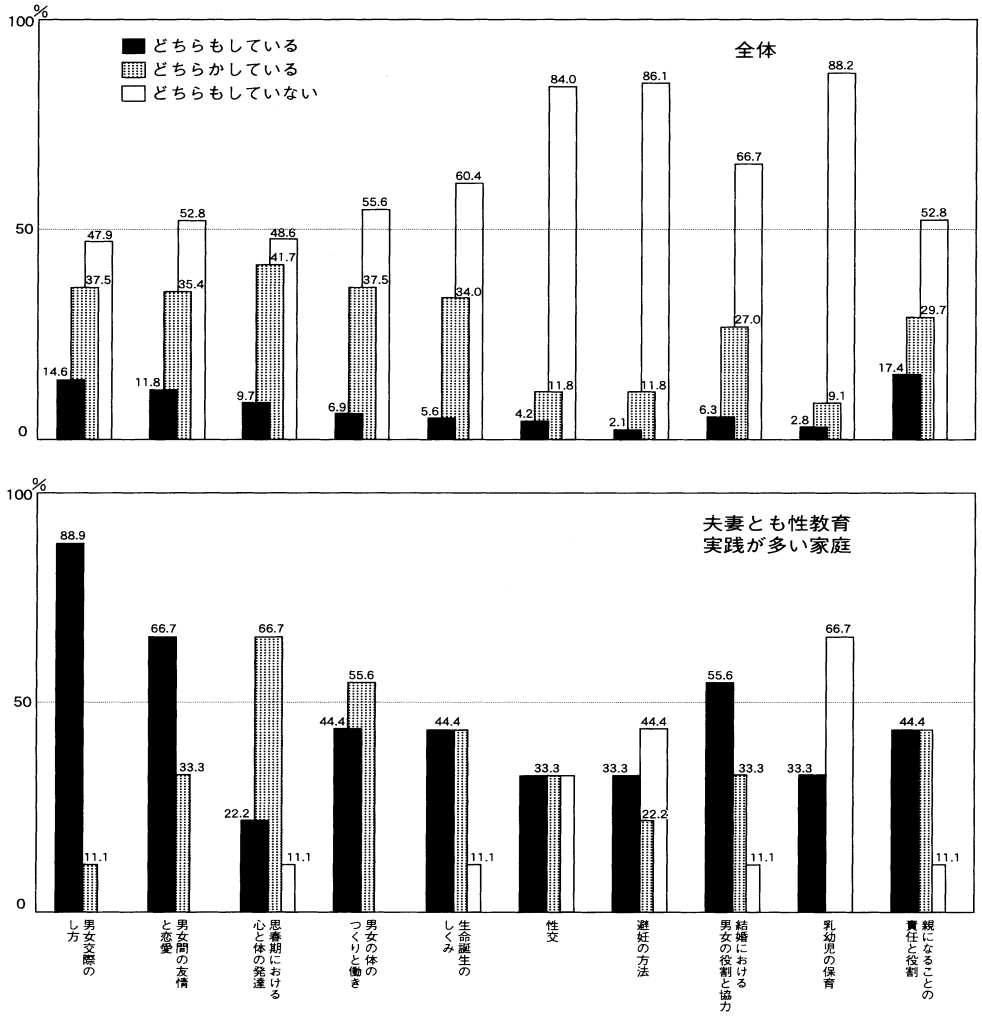

図5　夫妻とも性教育実践が多い家庭の実践内容（全体との比較）

さであり，他の項目でも6割から5割に達している。「どちらもしている」という家庭の割合が最も多い項目は「親になることの責任と役割」であるが，それも2割を下回る低さである。

一方，夫妻とも性教育実践が多い家庭では，「どちらもしている」という家庭の割合が最も多い項目は「男女交際のし方」89%であり，次いで「男女間の友情と恋愛」67%，「結婚における男女の役割と協力」56%の順である。これら3項目は，全体との差がとくに顕著であり，夫妻とも性教育実践が多い家庭で熱心になされている項目である。さらに，「どちらもしていない」という家庭の割合が全体では8割以上を占めている「性交」「避妊の方法」「乳幼児の保育」の項目をみると，夫妻とも性教育実践が多い家庭では，その割合が「性交」「避妊の方法」については3割から4割程度にまで低下している。しかし，「乳幼児の保育」については，夫妻とも性教育実践が多い家庭でも「どちらもしていない」という家庭の割合が多く，6割を超えている。

4．結論と考察

中学生の父親と母親を対象とした調査データをもとに，家庭での性教育への取り組みに及ぼす夫婦関係の影響について分析した。夫婦関係の要素として，夫の家事協力，夫婦の会話，スキンシップ行動を取り上げた。夫婦関係が性教育実践に及ぼす影響についての分析結果をまとめると，図6のようになる。家事に協力的か否かは，夫自身にとっては，夫婦の会話やスキンシップ行動の活性化とは関連がない。妻にとっては，夫の家事協力は夫婦の会話とは関連がみられないが，スキンシップ行動を活性化させる要因になっている。夫と妻のいずれについても，スキンシップ行動は性教育実践に影響を及ぼし，スキンシップ行動の活性化は性教育実践を促進させる要因としての働きがある。さらに夫と妻のいずれも，夫婦の会話は性教育実践と直接には関連がみられないが，スキンシップ行動に影響を及ぼすことを通して性教育実践を促進させる要因になっている。夫の家事協力，夫婦の会話，スキンシップ行動の程度についての夫の認知と妻の認知，夫の性教育実践と妻の性教育実践の程度は相互に関連している。

夫自身にとっては，家事協力は夫婦の会話とスキンシップ行動のいずれにも影響を及ぼしていないという結果である。家事をよく協力するという夫は本調査では1割にすぎなかった。他の調査でも類似の実態であり，このように家事参加が乏しい現状では，夫にとって家事をすることは主体的な役割行動ではない。妻に促されて仕方なく，あるいは頼まれたからするという場合が多く，家事参加が受身的対処にとどまっているからではないだろうか。しかし，妻にとっては，夫が家事に協力的であることはスキンシップ行動を活性化する要因になっている。受身的であれ，夫が家事に協力すれば妻の負担は軽減し，日常生活が支えられ

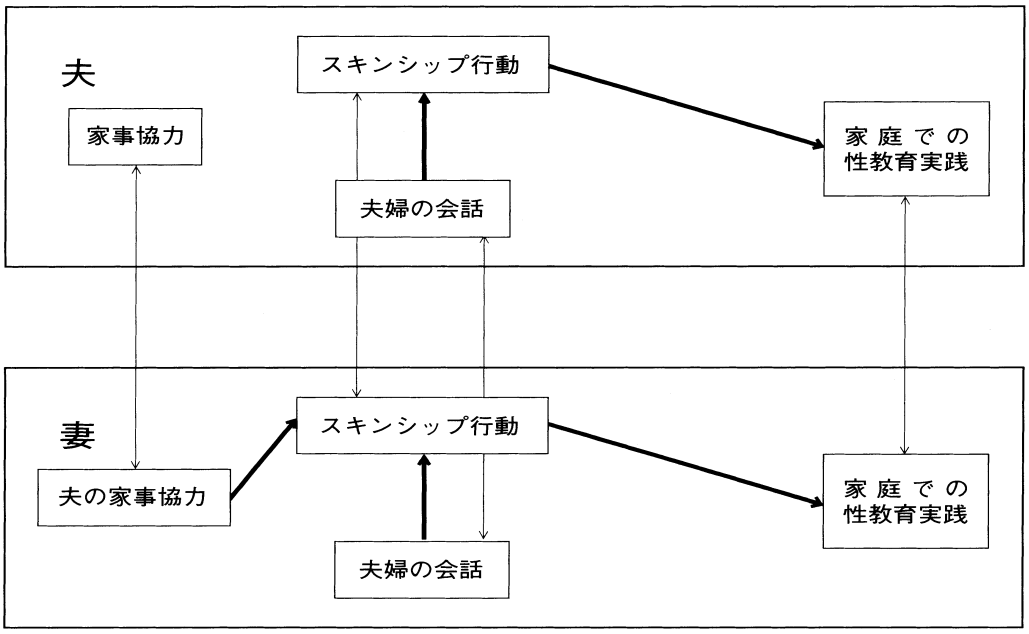

図6　家庭での性教育実践に影響する要因

る。そのことが夫への親密感を強め，愛情表出行動としてあらわれるのだろうと考えられる。

夫だけでなく妻の場合も，夫の家事協力は夫婦の会話を増加させる要因になっていない。夫婦の会話と家庭での性教育実践との間にも関連がみられない。夫婦の会話は夫の家事協力の影響を受けず，性教育実践に対しても影響を及ぼさないという予想外の結果から，次のことが指摘できる。夫婦の間で会話が多くとも少なくとも性教育への取り組みに差がみられないということは，性教育に限ったことではないように思われる。家庭の教育力の低下が社会的な問題になっているが，一般に夫婦の話題の中心は子どもであり，そのことは本調査結果でも確かめられた。しかし，欧米に比べると日本の夫婦は会話が乏しく，子どものことを話す割合も少ない[24)25)]。日本では子どものことを夫婦共通の話題にはしても，しつけや教育についての話し合いや議論はあまりなされていないのではないだろうか。詳しく検討するための調査が必要である。

夫と妻のいずれについても，夫婦の会話はスキンシップ行動を活性化する効果があることが確認された。夫の場合はとくに，家事協力とスキンシップ行動との間に関連が認められないことから，夫婦の会話は良好な夫婦関係をつくるための鍵になるといえる。さらに，スキンシップ行動が性教育実践に影響を及ぼすということも夫と妻に共通に認められた。スキンシップを社交儀礼として用いる習慣は日本にはないので，一般に対人関係における情緒的親密さの表出としてとらえられる。夫婦間のスキンシップによる愛情表出行動が性教育への取り組みを促進させるという知見は，夫婦としての関係が親としての役割行動に影響を及ぼすことを示している。さらに，夫の家事協力，夫婦の会話，スキンシップ行動の程度についての夫の認知と妻の認知，夫の性教育実践と妻の性教育実践の程度が相互に関連があることも認められた。妻から夫へ，夫から妻へ，いずれからであるにしても，夫婦が自分の考えや感情を伝え，話し合うための働きかけをすることが大切である[26)]。そのような，夫婦の関係を良好にし情緒的結びつきを強める努力は，親子の関係を改善する要因になると考えられる（図７）。

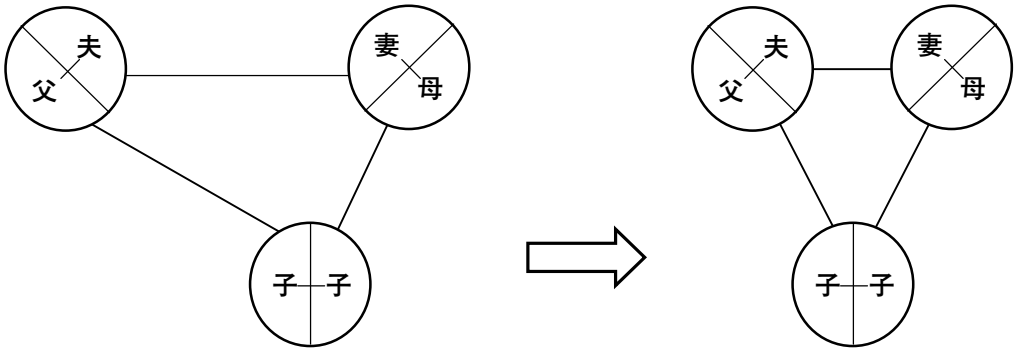

図７　夫婦関係は親子関係を変える

すでに前報で以下のことを明らかにした。禁欲的セックス観は性に関する会話抵抗感を強め，性教育実践を抑制する作用をもつ。とくに妻の場合は夫よりも否定的で禁欲的なセックス観をもち，禁欲の必要性の意識がセックスの快楽の否定や男性による女性の道具視という，否定的なセックス観と結びついているという問題がある。夫のセックス観については夫婦関係との間で関連が認められなかったが，妻についてはスキンシップ行動と会話が影響を及ぼしていることが分かった。夫との会話が少ない，スキンシップ行動がない，情緒的交流の乏しい妻は，否定的で禁欲的なセックス観をもつ者が多く，夫婦関係の改善がもたらす効果はとくに妻に対して大きいといえる。すなわち，夫婦関係を良好にするための努力はセックス観の不一致を埋め，夫と妻が協力して性教育に取り組む要因となり，家庭での性教育実践力を高めるのに役立つ。

さらに次のことを指摘したい。本研究では性教育の課題として,「幼児の発達を理解し関心を高めることによる親準備性」を重視し，親としての資質や能力の育成に必要な事柄を付け加えた。だが，夫と妻がともに性教育実践が多い家庭においてさえも，乳幼児の保育については６割以上の家庭で夫と妻のどちらもしていない。その割合は性交や避妊の方法よりも多く，乳幼児の保育はとくに軽

視されている。中学校の家庭科では学習内容の柱の一つに保育が位置づけられているが，家庭では保育について話し合い指導することに対する親の関心は低く，学校任せの状態である。中学生はまだ子どもという意識をもつ親が多く，性交や避妊の方法とは異なる指導のしにくさがあるのだろうが，少子化によって子どもたちが乳幼児に身近に接する機会は乏しくなっている。学校と家庭の連携協力なしには，保育への理解と具体的スキルなど親としての資質や能力は育ちにくい。妻だけでなく夫も，女子だけでなく男子に対しても意識的に取り組むために，父親と母親の関心を高めるなどの働きかけが必要であり，学校がはたす役割は大きい。

引　用　文　献

1）東京都性教育研究会（編）（2002）児童・生徒の性，学校図書，東京，41-52
2）厚生労働省（2000）母体保護統計
3）日本青少年研究所（1997）ポケベル等通信媒体調査報告書，日本青少年研究所，東京，61-75
4）奈良由美子・滝井崇子（1999）性情報とこどもたち，『豊かな人間性を育む家庭生活』（大阪教育文化センター「家庭調査」研究会編），木田淳子，大阪，131-142
5）警察庁生活安全局少年課（2003）青少年と生活環境等に関する調査報告書，120-122
6）毎日新聞2002年12月26日夕刊
7）原純輔（2001）『「若者の性」白書』（日本性教育協会編），小学館，東京，8-22
8）松浦賢長，樋口善之，北村邦夫，佐藤郁夫（2004）親子間の性に関する会話と子どもの性行動との関連，平成15年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書，470-483
9）松浦賢長（2004）新しい時代の性教育を考える，現代性教育研究月報，日本性教育協会，VOL.22，NO.5，1-7
10）東京都性教育研究会（編）（1993）児童・生徒の性，学校図書，東京，10，127，143
11）高橋久美子（2006）高校生の携帯電話の使用と家庭でのルール作りの実態，福岡教育大学紀要，第55号第5分冊
12）高橋久美子（1997）家庭における性教育の現状と課題，日本家政学会誌，48，273-275
13）高橋久美子（1999）中学生の父母はどう性教育をしているか，日本家政学会誌，50，621-629
14）高橋久美子（2003）親の性意識が性教育に及ぼす影響，日本家政学会誌，54，59-67
15）木下栄二（1996）親子関係研究の展開と課題，『いま家族に何が起こっているのか』（野々山久也，袖井孝子，篠崎正美編著），ミネルヴァ書房，東京，136-158
16）大日向雅美（1982）母親の心理的安定と充足を求めて，『育児ノイローゼ』（佐々木保行他），有斐閣，東京，155-182
17）袖井孝子（1986）家族関係論，『新家政学』（林雅子，石毛フミ子，松島千代野編），有斐閣，東京，141-144
18）坂西友秀（1987）全体としての家族，『家族関係の社会心理学』（長田雅嘉編），福村出版，東京，130-136
19）長津美代子・細江容子・岡村清子（1996）夫婦関係研究のレビューと課題，『いま家族に何が起こっているか』（野々山久也，袖井孝子，篠崎正美編著），ミネルヴァ書房，東京，159-186
20）姫岡勤（1974）夫婦の勢力関係としつけ，『現代のしつけと親子関係』（姫岡勤・上子武次・増田光吉編），川島書店，東京，95-121
21）本村汎・斧出節子（1987）夫婦の勢力関係と子供のパーソナリティ，大阪市立大学生活科学部紀要，35，433-441
22）斧出節子・本村汎（1986）夫婦の結婚満足度と子どものパーソナリティ，大阪市立大学生活科学部紀要，34，387-399
23）梶浦真由美・宮下美智子（1998）夫婦関係の子どもに及ぼす影響，大阪教育大学紀要，Ⅱ，37，41-56
24）日本青少年研究所，日本性教育協会（1986）結婚をめぐる日米比較調査
25）湯沢雍彦編（1995）図説 家族問題の現在，日本放送出版協会，東京，98-99
26）神原文子（1991）『現代の結婚と夫婦関係』，培風館，東京，222-225